

受験番号

広島市立看護専門学校 第一看護学科

## 令和五年度推薦入学試験問題

### 「国語」

【試験上の注意：答えはすべて解答用紙に記入すること】

一 次の文章を読んであとの問いに答えよ。

ヘイドン・ホワイトは『物語と歴史』（海老根宏 原田大介訳）において歴史表現には三つの種類があると指摘している。その三種類とは、年表と年代記と厳密な意味での歴史である。

ヘイドン・ホワイトは、年表の例として『ゲルマン史録』に含まれた八世紀から一〇世紀にかけてのゴール地方の諸事件を記した『サン・ガル年表』を挙げている。その一部を引用する。

七二五 サラセン人が初めて現われた。

七二六

七二七

七二八

七二九

七三〇

七三一 尊者ベードダ長老が死んだ。

七三二 シャルルが土曜日、ポワティエでサラセン人と戦った。

この年表について、ホワイトは、七二五年のサラセン人の侵入について記している点でこの年表制作者は、一見サラセン人がヨーロッパの地への出現したことに関心を抱いているように見えるとする。しかし、その七年後のシャルルとサラセン人との戦闘であるポワティエの戦いについて言及しているものの、その結末について記していない点で、本当にサラセン人の侵入に関心があるのか疑問を感じさせる。と指摘する。

A、サラセン人の出現がヨーロッパの地への侵略として意識されているなら、最初の出現の(一)帰結としての戦闘の結果について記すはずだというのだ。しかし、結果についての記述がない点で出現と戦闘との間にこの年表作者は、因果関係を設定しているか不明になる。

B、このポワティエの戦いの起きた年は、現代の西洋史の視点から言うより重要なトゥールの戦いが発生した年でもあり、それについての記述がないと現代の歴史家から指摘されるとする。また、七三二年のポワティエの戦いについて日時でなく「土曜日」とのみ記されているのも読む者を( )当惑させるといふ。

現代のわれわれから見れば不備や (b) 欠損の多い、こうした年表が出来るのは、その年表が作者の固有の視点により記録されているからだ。(2) この年表はそれが記された時代から一三〇〇年近く後の時代を (さらにヨーロッパでない日本で) 生きるわれわれからすると不可解なものであるが、その理解し難さが、逆にその時代を生きた者のみの持ちうる固有性、換言すれば当事者性を伝えるものだと言える。

固有性Ⅱ I を持つ年表には、理解し難い点があると述べた。それはまた、事件の現場にいた者の言葉には、どこか II があるということである。直接的に事件を体験した者の言葉には、通常われわれが感じる「臨場感」とは異なるものがあるということだ。たとえば、二〇〇一年に発生した九・一一同時多発テロの際、テレビ画面に映し出された世界貿易センタービルに突っ込むジェット機の映像について、まるでハリウッド映画を見るようだと言っている者が多くいた。C、多少とも映画を見たことがある者なら、こんな言葉は III するはずがない。ハリウッドの映画監督なら、単にロングショットでジェット機が貿易センタービルに激突するだけの場面を撮るはずがない。ジェット機がビルに衝突するロングショットのシーンと映画の登場人物の視点、たいていの場合、そのビル内において飛行機の衝突に (c) 遭遇するという視点で撮られたシーンとビルに近付いてくるジェット機をアップで撮るシーンとのカットバックで α のある絵を作るはずだ。(3) 焦点の合わない、あのロングショットの映像が、映画制作者が作ったものなら、間違いなくボツにされただろう。

映画を評する時にしばしば使われる「迫真の」といった表現は、本当に現場に居た当事者が見た光景をそのまま再現したものではなく、事後的に構成されたものに対して使われるものである。

本当に事件の現場に居て、その事件を直に体験した者の言葉はむしろ漠然としており、欠落を多く含むものである。

大震災直後の二〇一一年六月に出版され話題を呼んだ本に『つなみ被災地の子ども80人の作文集』(『文藝春秋』二〇一一年八月臨時増刊号)がある。題名の通り、津波の被害にあった子供たちの書いた作文を掲載したものだ。

その中に、仙台市の若林区で被災した小学校二年の女の子の作文がある。

帰るとちゅうに強いじしんがきました。つなみがきたからびっくりしました。でもつなみが大きかったので、びっくりしました。つなみがきて大きくなってはじめてです。そのときは、だれもいませんでした。がんばって学校の2かいで1(ひ)とりでいたのでさびしかったです。

友だちが2(ふ)たりいたのでだいじょうぶでした。つなみのせいで大切なものながされました。でもこんど家にあったものをさがしていきます。まどから見てたら50メートルいじょうありました。でもがんばって学校で一日すごしました。

一読して意味が上手く読み取れない箇所が多数ある。学校の二階に一人でいたと書いているが、次の段落では友だちが二人いたとある。だから、友だちは二人いたが、家族がいなかったのか、寂しかったということなのか。大切なものが流されたとあり、それは家にあったもののようなのだが、そのことと窓から見たら五〇メートル以上あったものとは関係があるのか、ないのか。また何が五〇メートルなのか。津

波の高さにしては高すぎる。だが、子供の目から見るとそれほど **IV** 見えたということか。あるいは五〇メートル以上の範囲が津波で浸水したということなのか。ここも判然としない。

**D** この少女の作文は意味の不明瞭な箇所が多い。小学二年生の書いたものだからとも考えられる。しかし、同書に掲載された、この子と同じ二年生やより年少の一年生の書いた作文では、自身の体験したことが時系列に沿って **V** 書かれている。この少女の個人的資質の問題かもしれない。しかし、そうした形式的に整った作文よりも、この少女のほとんど支離滅裂なものの方が、むしろ読む者の心に強い印象を残す。

実は、震災でこの少女はとて **(d)** 苛酷な状況にあった。津波で母親と幼い弟を亡くしていたのだ。それだけではない。父方の祖父母と母方の祖母を含め一三人の親族を津波で亡くしていた。それ以外にもこの少女の家族には複雑な問題があったことが、この作文集の編者である森健が「『つなみ』の子どもたち 作文に書かれなかった物語」で明らかにしている。「つなみのせいで大切なものがされました」という箇所は、この作文だけからなら、好きな人形などのおもちゃでも流されただろうとしか思えない。しかし、彼女の状況を知れば、この作文の背後には、一〇歳にもならない子供が耐えられるのだろうかと思われるほど痛ましい経験が控えていることが推測される。

この少女の作文が断片的なのは、八歳の少女にとって自身に起きたことの大きさを **(e)** 示唆しているとも言える。押し寄せる黒い津波。家族と離れ学校に避難していた時の不安。学校の窓から見えた津波によって破壊された街並み。そして母と弟の死。そうした経験を整然と言葉にすることなど一〇歳に満たない少女には到底できることではないだろう。不安、恐怖、悲しみ、孤独あるいは悔恨。いやそうした半ば **VI** された既成の言語では表現しきれない思いをかりうじて絞り出すように言葉にしたのがこの作文だったのでないか。断片化され、脈絡も不明な言葉の連鎖こそ、混乱した少女の心をかりうじて示している、ともとれる。

**(4)** 抱えきれないほどの経験をした者の言葉とはこのようなものかもしれないのだ。そしてこの少女の作文は、欠落が多くそこに一貫した筋を見出し難い『サン・ガル年表』に似ていないか。サラセン人の襲来、ペーダ長老の死そしてポワティエの戦い。こうした事象の間にどんな結び付きがあるのか、現代を生きるわれわれには不明だ。そもそも、その時々、この年表制作者の心を揺るがせた事件が記されているだけかもしれない。

津波の被災者となった少女の作文と『サン・ガル年表』に欠けているものは、事象と事象とを結び付ける **β** の糸ではないか。

(出典：千葉一幹『現代文学は「震災の傷」を癒やせるか』ミネルヴァ書房)

問一 空欄 **A** **D** を補うのに最も適当な語を、次の **(ア)** **(イ)** **(ウ)** **(エ)** **(オ)** の中からそれぞれ一つ選んで符号で書け。

**(ア)** かし **(イ)** もし **(ウ)** このように **(エ)** はたして **(オ)** また

問二 傍線部 **(1)** 「帰結」の意味として相応しいものを、次の **(ア)** **(イ)** **(ウ)** **(エ)** の中から一つ選んで符号で書け。

**(ア)** 最終的によい結果をもたらすこと **(イ)** 最終的に問題が解決すること

(ウ) 最終的な、ある結論・結果に落ち着くこと (エ) 最終的な局面を打開すること

問三 波線部 (a) ~ (e) の語の読みを記せ。

問四 傍線部 (2) 「この年表はそれが記された時代から一三〇〇年近く後の時代を (さらにヨーロッパでない日本で) 生きるわれわれからすると不可解なものであるが、その理解し難さが、逆にその時代を生きた者のみの持ちうる固有性、換言すれば当事者性を伝えるものだと言える」とあるが、それはどういうことか。簡潔に説明せよ。

問五 空欄 I ~ VI に入れるのに最も適当な語を、次の (ア) ~ (エ) の中からそれぞれ一つ選んで符号で書け。

空欄 I	(ア) 当事者性	(イ) 現場性	(ウ) 時代性	(エ) 作者性
空欄 II	(ア) 油断	(イ) 不可解さ	(ウ) 欠落	(エ) 固有性
空欄 III	(ア) 公表	(イ) 吹聴	(ウ) 開示	(エ) 表明
空欄 IV	(ア) 不吉に	(イ) 巨大に	(ウ) 無限大に	(エ) 圧倒的に
空欄 V	(ア) 淡々と	(イ) 平然と	(ウ) 整然と	(エ) ひっそりと
空欄 VI	(ア) 簡略化	(イ) 合理化	(ウ) 具体化	(エ) 抽象化

問六 空欄 α に入る言葉を、それぞれ本文中から抜き出せ。

問七 傍線部 (3) 「焦点の合わない、あのロングショットの映像が、映画制作者が作ったものなら、間違いないボツにされただろう」とあるが、それはなぜか。簡潔に説明せよ。

問八 傍線部 (4) 「抱えきれないほどの経験をした者の言葉とはこのようなものかもしれないのだ」とあるが、それはなぜか。「このようなもの」の内容を具体的に示しながら説明せよ。

二 次の文章にある傍線部のカタカナ表記を、漢字に改めよ。

夕方になった。ビルの①ハザマに陥ちこんで一軒だけ古い平屋の、この家のなかにも、日が暮れるのはわかる。狭い庭に面して縁側のついた八畳の②ザシキか六畳の茶の間にいけば、東京に射す陽がまずこの庭から翳ってゆくのがよく見えるが、玄関脇の三畳にいて窓を閉めていても、やはりそれは感じられるのだ。お前ひとり住むのだからどの部屋でも好きに使え、と伯父は言ったが、娘の頃あてがわれていた小部屋の壁にもたれかかっているのが、一番いい。壁にもたれて、傍においたトランプの札を片手で掻き混ぜるように、記憶の破片をうつつといじり廻す。その一片をひよいと摘み上げて、じいっと見入る。そんなことをするのに広い場所はいらぬ。破片はいくらでもあるので③シュウジツそうしていても、退屈しない。ふと気がつく、夕闇の底に沈んだ家の、その底に、ちゃんと正座している自分にびっくりすることがある。退屈はしないが、夕方になるとお腹が空く。記憶の破片の散らばった夕闇の底から自分を剥がすようにして台所に立つ。狭いふるい台所だが電灯を点けると此処には、伯母の時枝の④ケハイが生き生きと残っている。私がフランスから帰ってから伯母が急死するまで二ヶ月の間、ふたりで一緒に夕飯の⑤シタクをした。